□8月27日　主日礼拝説教短縮版（隅野瞳牧師）
「わたしたちは主のもの」（ローマ14:1～9）

ローマ教会には信仰の弱い人と強い人との間に、不協和音がありました。信仰の弱い人とは、偶像に供えられた可能性のある異邦人の市場の肉を食べず、安息日や断食日を遵守するユダヤ人クリスチャン。信仰の強い人とは、全てのものは神によって造られ、偶像という神はないのだから、食べ物や日に縛られる必要はないと考える異邦人クリスチャンを指します。パウロは信仰の強い人に、キリストが受け入れてくださったのだから弱い人を受け入れなさい、あなたが軽蔑し裁いている人は同じ神の召し使いであって、自分を神の立場に置いてはいけないと語ります。教会において、自分と全く違う環境や価値観のもとで育ってきた方々と時に感情がぶつかったり、日本でキリスト者として生活するために、社会やそこに属する方々とどのように折り合いをつけるか葛藤することもあります。しかし祈って向き合う中で、相手の方がどんな立場であっても、主であれば共に喜び共に泣いてくださるのだと気づくのです。

主イエスの愛の律法は、神を愛し、主が愛されたように、隣人を自分のように愛することです。それは簡単に機械的に、すべての人に同じ答えが出るものではないし、出すべきではないでしょう。私たちの歩み、選択の一つひとつが自由意志に委ねられていることもまた、主イエスによる救いの大きな恵みです。罪から救われて主のものとされる。それは私たちの生きる動機が、誰かに強いられたからとか、自分の欲望に支配されるのではなく、聖霊の示される御言葉に導かれて歩めるようになることです。

生きる時も死ぬ時も、私たちは主のものです。いつ何をするとしてもそこに神がおられ、主の救いの恵みの中で感謝して生きることができます。それはまた隣人を愛し、自分の権利を相手のために喜んで手放す生き方です。神は死をも超えて永遠に私たちと関わって下さるために、御子の十字架と復活による贖いを成し遂げられました。わたしたちの命がキリストに属するものとなるならば、この体の命が終わる時さえも、決して独りではありません。自分の正しさを主張することを手放して愛するほうへと一歩、主とともに歩み出し、そこに現わされる神の国をご一緒に仰ぎ見ましょう。（終）